この文章を読むキミにとって、この物語は単なる架空の物語だろう。僕にとっても過去にあった話ではなく、未来に現れる予言でもない。それでも僕にとっては真実だったと言ったならば、キミは困った顔をするのだろうか。

そう、この物語は、僕にとっての真実なのだ。

世界五分前仮説が事実であると証明することが出来ないように、僕も僕のこの記憶が事実であると言うことは出来ない。それでも逆に。真実でないと否定されるものでもないのだから。

この物語は、僕が認識する世界の一つを記したもので。

僕とユウの二人だけの物語である。

＊

目が合った。その時僕は、そう、感じた。

ユウは特大の溜息をつきながら、手元へとゆっくり視線を移した。折りたたみテーブルの上に広げられた参考書の頁をめくりはするが、目はかろうじて文字を追っているだけに見えた。

「進学するべきだって、言われたんだ」

ぴぴぴと電子音が鳴り響いた。ユウは無造作にアラームを止め、よいしょと声をかけて立ち上がった。

「言われたの」

「三者面談でね。せめてどこか受験してくれって」

ユウは溜息を挟み込むようにして参考書を閉じた。カラーボックスへとしまうと、鉛筆消しゴム、筆記用具を筆入れに戻していく。

「なんで」

空になった折りたたみテーブルをひっくり返す。僕を見ることもなく、四ツ足を一つ一つきしませながら折っていく。

「学校の宣伝になるんだって。私は塾にも行ってないしね」

予備校なんて行く時間もお金もないし。

ユウは自嘲気味に笑いながら、机を部屋の隅の定位置へと片付けた。
「受験料、結構高いんだよね」
就職するのなら情報を集めたり対策を始めたり、そろそろしないといけないのだと、ユウは溜息をこぼすように呟いた。受けて合格する気なら、勉強はもちろん継続になる。
ユウはトレーナーの裾へ手をかけた。一息に脱ぎさると、部屋の隅のかごへとトレーナーを放り込む。
ユウは僕の見ている前で、飾り気のない下着だけを身につけた姿になって。タンス代わりの段ボールボックスへと手を伸ばした。
「ユウなら、行けるよ」
「そうかな」
ユウは長袖Tシャツに手をかけた。引っ張り出して、ふと、僕を見た。
目が合った。ユウはゆっくり、瞬きした。
「ユウ、頭いいもん！」
甲高い子供の声が響き渡る。……僕の声だと、唐突に気付いた。
ユウはTシャツを無造作に被る。瞬きを繰り返して僕を、見る。
「トオル……？」
——トオル。そう、僕は、トオルだ。
「指定校推薦ってヤツでも良いって先生言ってた！　奨学金だってあるからって」
ユウは僕を見る。鏡の前の僕を見る。足を、手を、胸を、頭を、目を。……僕を。
そしてゆっくり、そっと。ユウは僕へと手を伸ばした。
「トオル」
少し冷えたユウの手が、僕の足を突くように触ってくる。手に触れて、頬を撫でる。そして、僕のユウより一回りくらい小さな頭をユウは、そっと。
ユウの胸は暖かくて。石鹸に似た柔軟剤の香りがした。
「できる、かな」

「できるよ、ユウなら」
ユウは笑う。少しばかり照れたように。
そうして時計に気付くと慌てたようにパーカーを引っ掴む。鍵の入ったポーチを取ると、玄関で靴へと足を突っ込む。
「トオル」
最後に僕へと振り返ると。
「行ってきます」
夜の街へと踏み出していく。

→→→つづきは
《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！